

第 63 回文化講座

発掘調査速報 2015 その 2

【日時】 8月8日（土）13：30～16：00

【会場】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

あがりむらあと
東村跡発掘調査

沖縄県立埋蔵文化財センター
金城 貴子

所在地：那覇市東町 21- 1 番地 他 3 筆
時代：グスク時代～近代
調査期間：平成 26 年 7 月 1 日～ 12 月 26 日
調査面積：約 515m²

1 はじめに

本事業は、離島児童・生徒支援センター（仮称）建設に伴い、現状のまま残すことができない埋蔵文化財の記録作成を目的として実施した発掘調査である。

2 東村の概要

東村は、那覇港の繁栄によって形成された村。那覇港に近いこともあり、周辺には港湾に関わる施設などの他、琉球王国時代の役所の一つである親見世^{おやみせ}、冊封使の宿舎として利用された天使館^{てんしかん}などの公的な施設も立地していた。また、戦前には那覇市役所等の公的機関の他、銀行、商店が立ち並ぶなど、古くから那覇の中心地として多くの人で賑わいをみせた。

3 調査の概要

発掘調査の結果、グスク時代、近世、近代～戦前の様々な遺構や遺物を確認。

(1) 遺構

- ・グスク～近世：建物の柱跡、土坑、円形石組遺構、石列、貝集石遺構など
- ・近世：建物の柱跡、土坑、方形石組遺構、石列、溝状遺構など
- ・近代～戦前：建物の基礎跡、井戸など

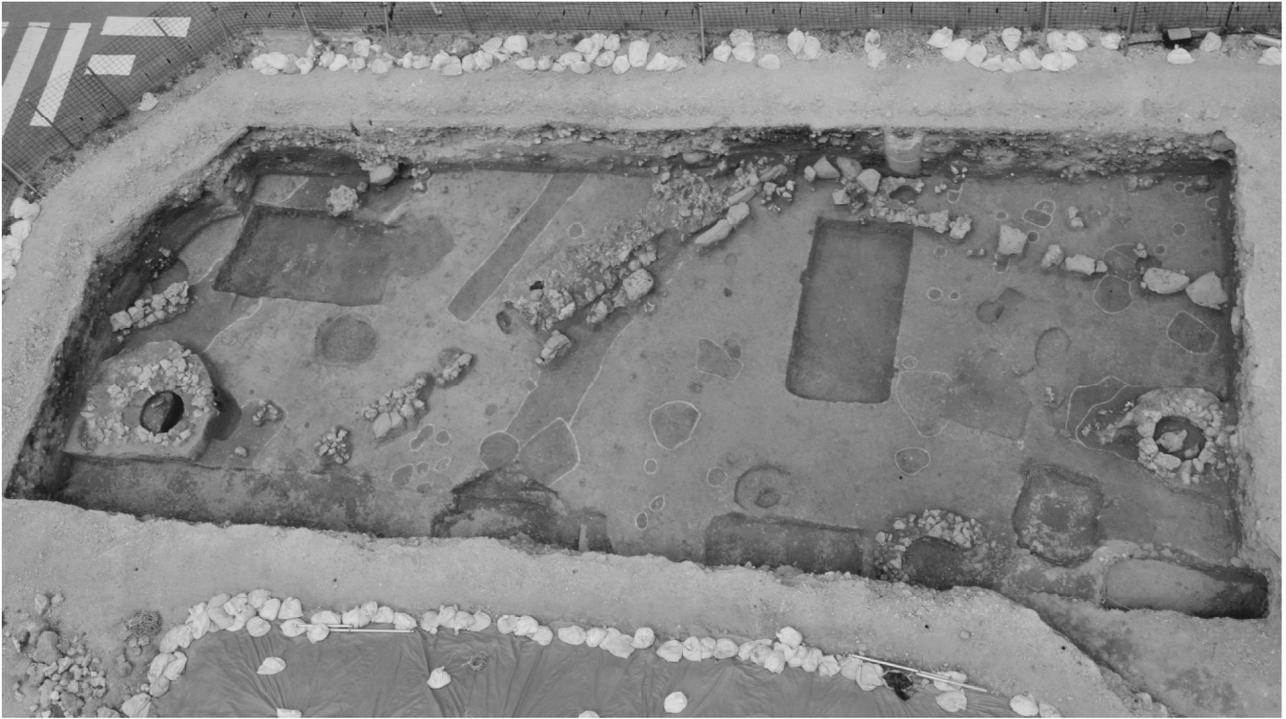
(2) 遺物

- ・グスク：陶磁器（中国・タイ・ベトナム産）、瓦（高麗系）、自然遺物など
- ・近世：陶磁器（中国・本土・沖縄産）、土器（宮古式・パナリ焼）、瓦（明朝系）、塼、煙管、古銭、自然遺物など
- ・近代～戦前：陶磁器（本土・沖縄産）、瓦、自然遺物など

4 今後の予定

今調査で得られた遺構や遺物について詳細な分析や検討を行い、調査成果をまとめた発掘調査報告書を刊行する予定。





1 地点 遺構検出状況（南から）



3 地点 遺構完掘状況（東から）



石列（東から）



円形石組遺構（北から）



方形石組遺構（南から）



溝状遺構（北東から）



遺物廃棄土坑（東から）



貝集積遺構（サラサバティ）

しゅり こうこうないなかぐすく う どうんあと
首里高校内中城御殿跡

沖縄県立埋蔵文化財センター
亀島 慎吾

所在地：那覇市首里真和志町 2-43

時代：グスク時代～近代

調査期間：平成 26 年 4 月 7 日～平成 27 年 2 月 27 日

調査面積：5230㎡

1 はじめに

調査経緯：首里高校校舎建て替えに伴う記録保存調査。

平成 23 年度に那覇市教育委員会によって試掘調査が行われ、同年、沖縄県教育庁文化財課によってグラウンドの造成土の掘削が行われた。平成 25 年 7 月末から本調査に着手し、平成 27 年 2 月末に調査が完了した。

2 中城御殿について

中城御殿：次期国王となる世子の居宅

新旧の中城御殿

1621 年～ 1640 年創建 首里高校内中城御殿跡

1875 年（明治 8 年）移転 中城御殿跡（旧沖縄県立博物館跡地）

3 首里高校内中城御殿跡

基本層序：大きく 3 つの文化層・遺構がある。

- (1) 中城御殿 移転後（近・現代）
- (2) 中城御殿（近世）
- (3) 中城御殿 創建以前（グスク時代 15 世紀～ 16 世紀）

中城御殿 移転後の遺構

校舎基礎跡、ゴミ捨て場跡、庭の池の跡など

中城御殿の遺構

大規模な平場造成、排水溝のある階段、井戸周辺の広場、洞穴内の石積み。

中城御殿 創建以前の遺構

柱穴、ゴミ捨て穴など

ゴミ捨て穴は、穴の壁に石積みをしているものがある。穴の中から、陶磁器、貝殻と一緒にガラス製品が出土している。

4 出土遺物

近代～15世紀ごろまでの遺物が出土。中でも、近世期の遺物が多く出土。

(1) 中城御殿 移転後

硯やボタンなど、学校関係の遺物が出土。

(2) 中城御殿

陶磁器、瓦、金属製品、玉、ガラス製品、自然遺物など。

(3) 中城御殿 創建以前

陶磁器（青磁、中国産褐釉陶器、タイ産褐釉陶器。）、金属製品、自然遺物、ガラス製品など。

5 普及活動（現場説明会、職場体験）

平成26年度

- 首里高校生対象の現場説明会。
- 県内の中学生・高校生対象の職場体験。
- 一般県民対象の現場説明会。

6 調査成果

- 近・現代からグスク時代までの遺物や遺構を検出している複合遺跡。
- 傾斜している地形を、造成で平地に形成し、建物を構築。
- 中城御殿の建物区画関連遺構は多いが、建物本体の遺構（礎石など）は少ない。
- 多種多様な遺物が出土。（特に中城御殿当時の遺物が多い）
- 中城御殿当時や創建以前の遺物が、遺物包含層や遺構からまとまって出土。ガラス製品など貴重な遺物が多く出土している。
- 中城御殿創建以前から中城御殿創建までの状況が判明。
- 移転後の中城御殿との比較検討も今後の課題である。



首里高校内中城御殿跡 位置図

遺跡の位置

国土地理院数値空中写真 2010 年撮影 C11-12



発掘現場全景 (調査終盤)



「首里古地図」と首里高校校舎配置の重ね図



井戸と井戸周辺の広場跡（中城御殿）



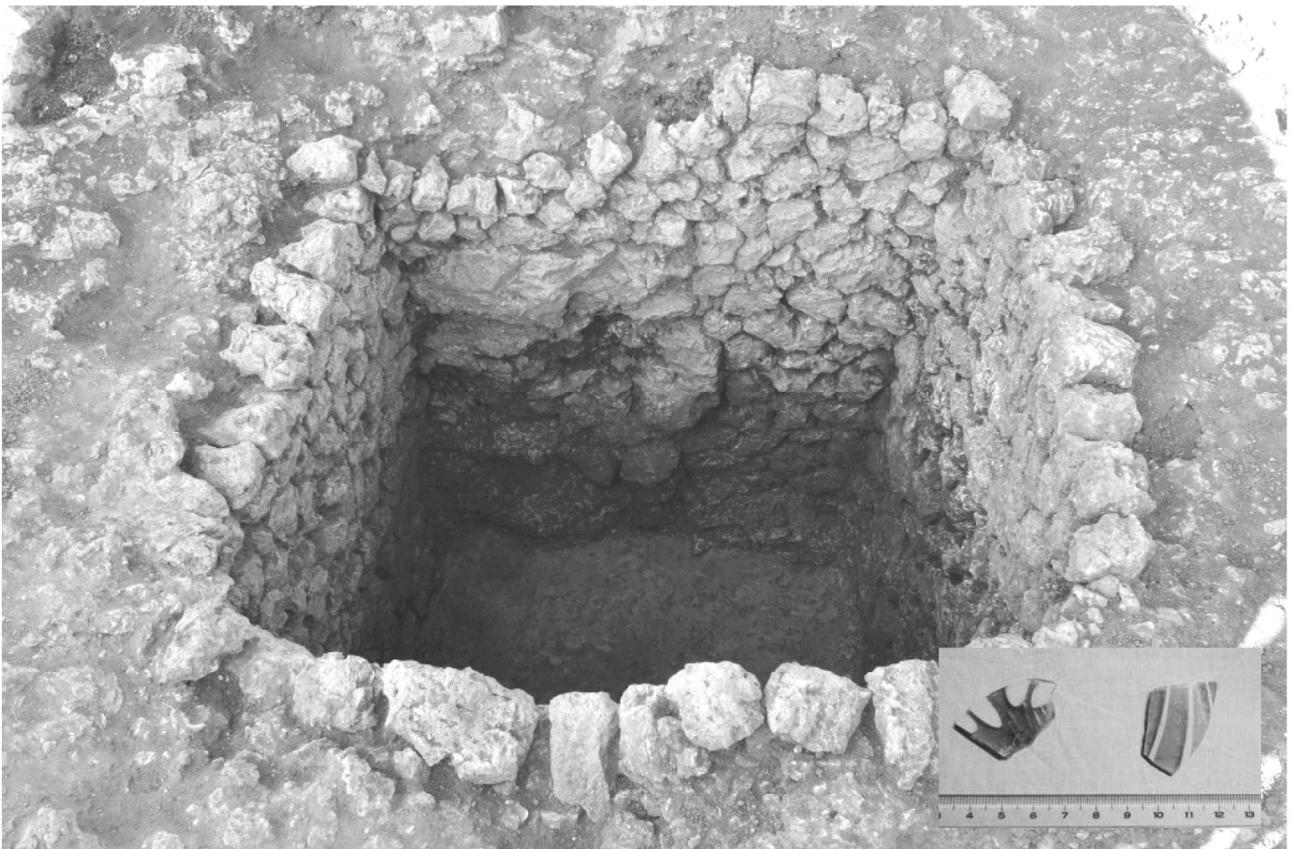
排水溝のある階段跡（中城御殿）



洞穴内部の石積み（中城御殿）



石積み内部の様子（中城御殿）



ゴミ捨て穴と出土したガラス製品(中城御殿 創建以前)

しゅりじょうこうえんなかぐすくう どうんあと
首里城公園中城御殿跡

沖縄県立埋蔵文化財センター

山本 正昭

所在地：那覇市首里大中町1-1番地

時代：近世～現代

調査期間：平成26年6月2日～12月26日

調査面積：420㎡

平成26年度発掘調査の主な成果

トレンチ1

中城御殿に関係すると思われる石列と石敷き、漆喰面が確認される。戦後の攪乱により、当時の床面のほとんどが掘削を受けていることが確認される。

トレンチ2

旧県立博物館の建物基礎により、当時の床面がほとんど残っていない状況である。僅かに石列並びに集石遺構が確認される。石列遺構は中城御殿以前に構築された遺構の可能性がある。

トレンチ3

建物基壇となる切石の石列が2基確認される。うち1基は中城御殿の中心となる施設、御寝廟殿ごしんびょうでんの西端基壇の根石であることが確認された。また、もう1基の石列は御寝廟殿と北之御殿を結ぶ渡り廊下の基壇根石であることも確認された。

トレンチ4

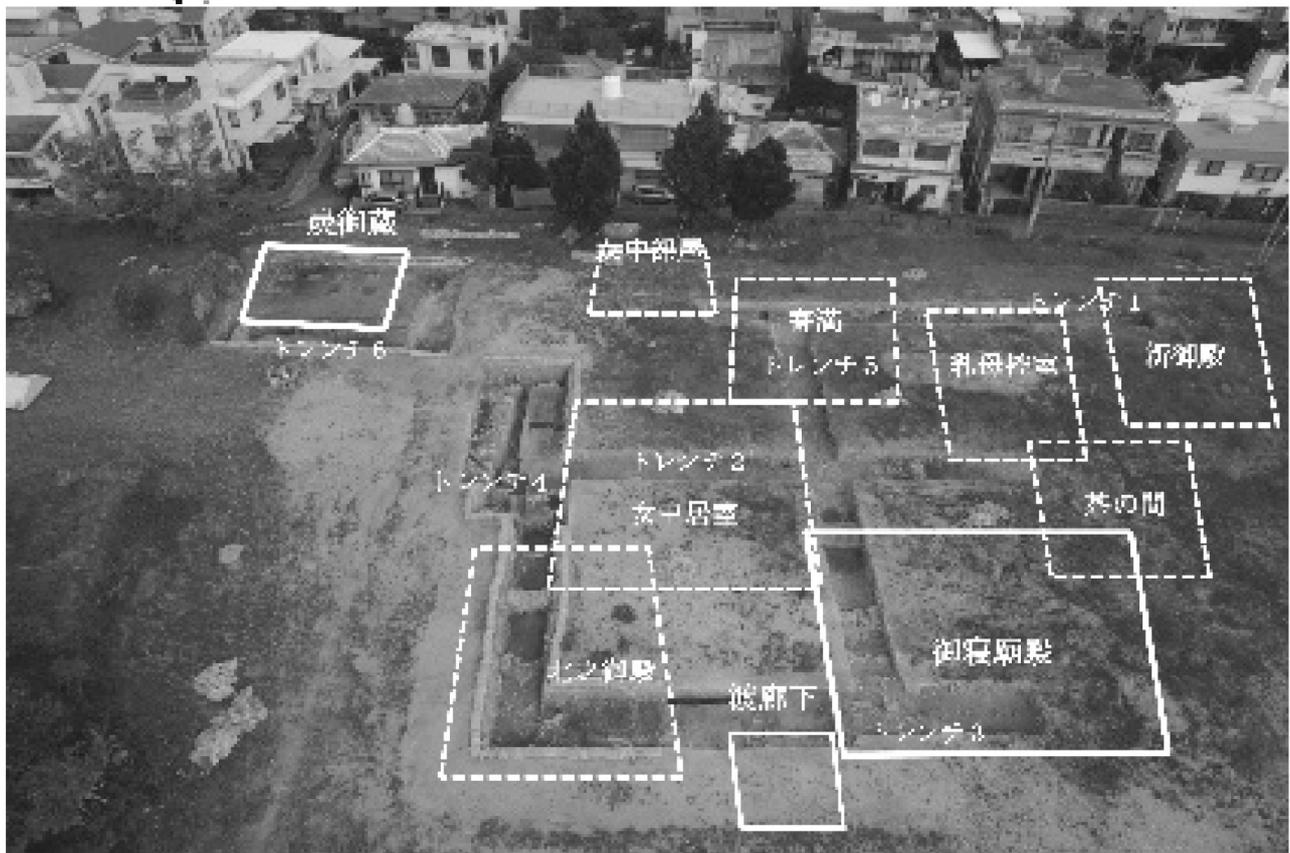
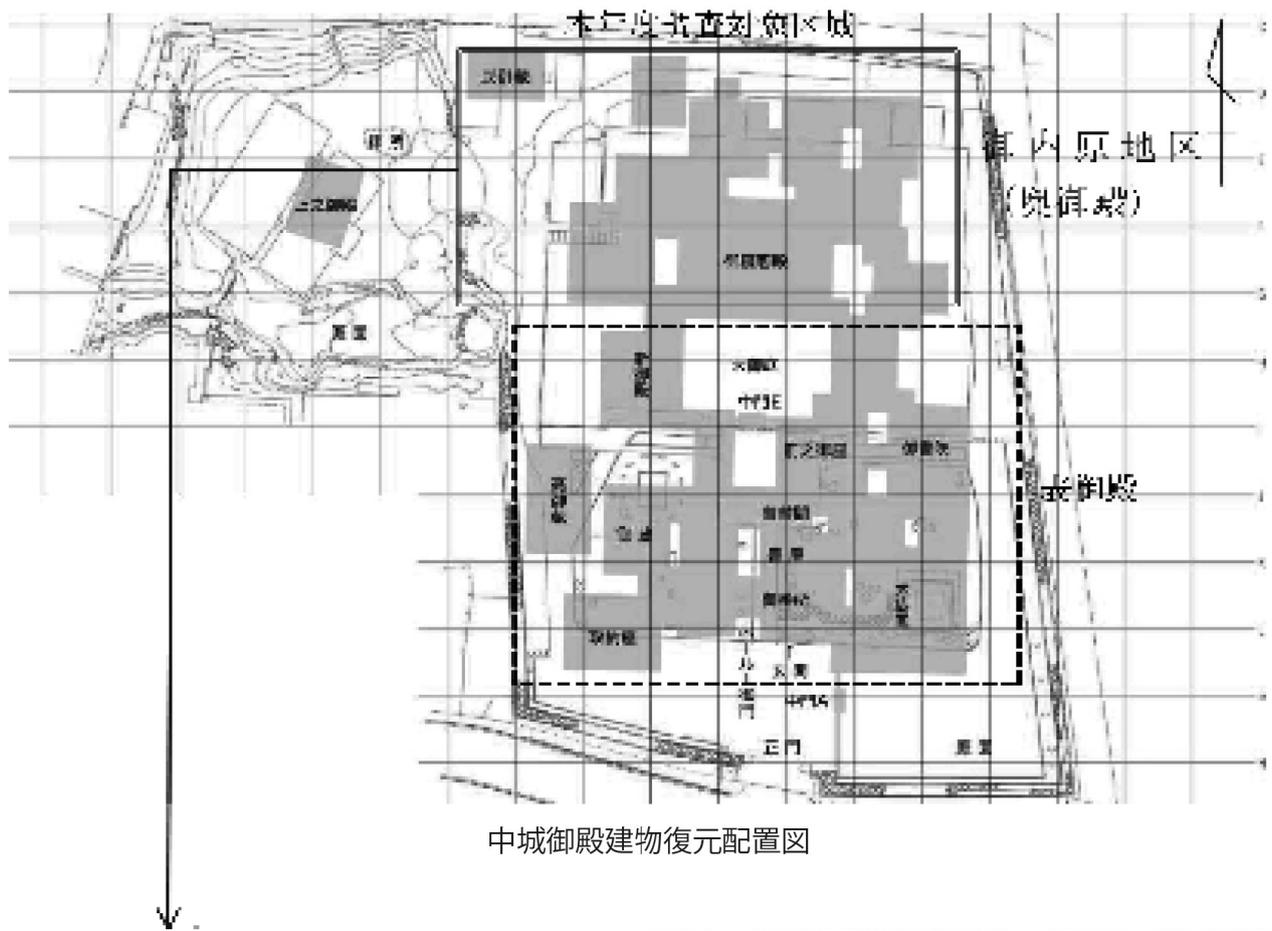
当該トレンチの北側にて石列遺構と溝状遺構が確認される。中城御殿に伴う遺構と考えられるが、その用途については不明である。

トレンチ5

戦後の攪乱が著しく、遺構は確認されていない。

トレンチ6

3×4間規模の割栗地業を施した建物基礎遺構が検出され、かつて中城御殿北西部に所在した炭御蔵すみの遺構であることが確認された。また、その東側に隣接して砂利道跡が検出されている。道の縁に設置された石造り側溝遺構と、縁石である石列遺構、それに接して舗装土が確認された。更に注目される遺構としてはトレンチ南側から検出された池状遺構が確認されている。当該遺構は床面と石積み面側にモルタルを貼っていることから大正末から昭和初めにかけて造営されたものと考えられる。この池状遺構は聞き取りや古写真などでは確認されておらず、今後において更なる検証が必要とされる。



平成 26 年度発掘調査区全景（破線はかつての建物配置：実線が今回確認された建物跡）



トレンチ3 検出 御寝廟殿建物基壇遺構
(東から)



トレンチ4 検出 溝状遺構 (北から)



トレンチ3 検出 御寝廟殿建物基壇遺構
(南東から)



トレンチ4 検出 石列遺構 (西から)



トレンチ3 造成状況 (東から)



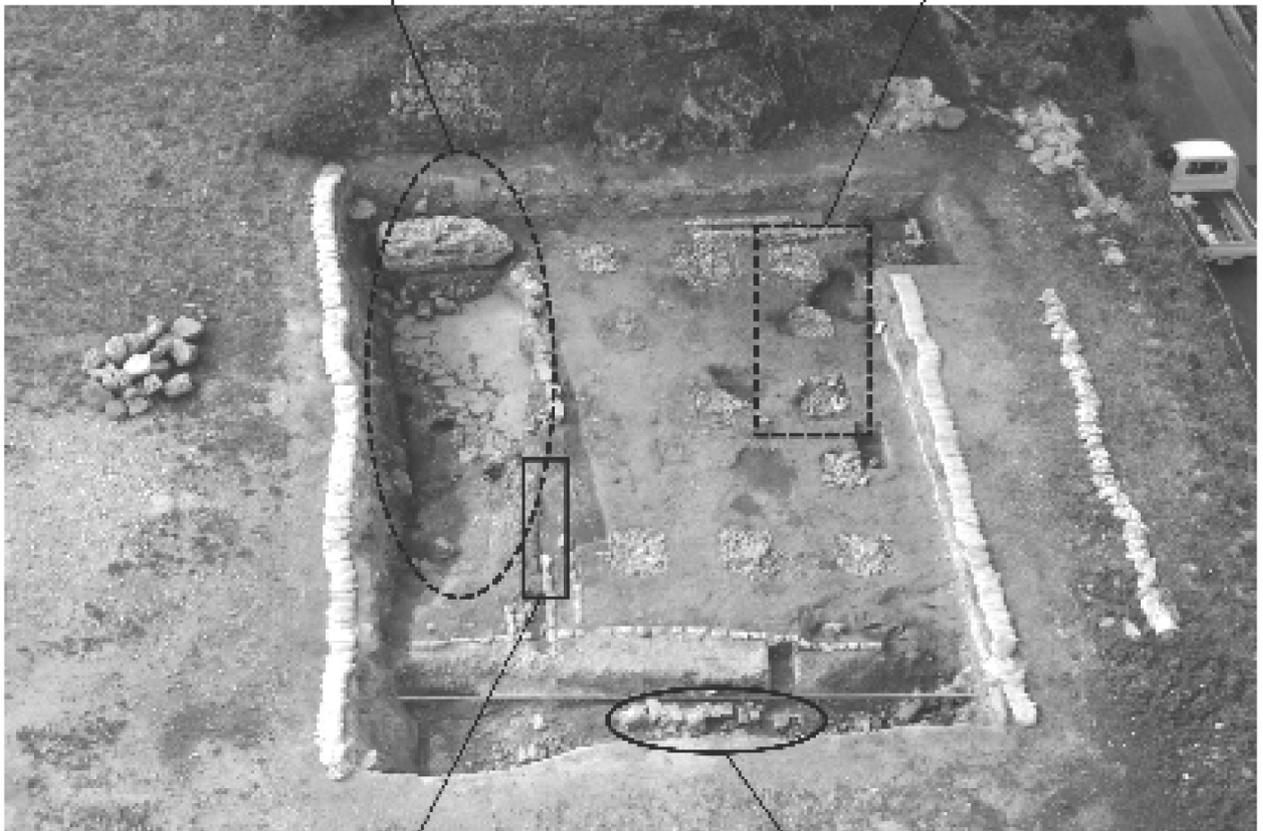
トレンチ2 検出遺構 (北から)



池状遺構



柱の基礎事業



トレンチ6全景 (東から)



陶管出土状況



道遺構と側溝遺構



トレンチ6全景（西から）

○中城御殿跡略年表

西暦	元号	事項
1632～40	尚豊正代	尚豊正代、中城御殿が現県立首里高校の地に建設される
1870年	尚泰28/明治3年	中城御殿が、龍潭池側に新しく造営されることが決まる
1875年	尚泰28/明治8年	世子・中城王子が築城された皇居に移る
1870年 1864年	尚泰32/明治12年 明治7年	赤松氏興。尚中城が北に遷し、尚豊王以下中城御殿に移る。 中城御殿ほか15ヵ所の敷地、造物など尚泰の私有財産と確定される 8月下旬、宝物を3つの大金庫へ移す 1月5日頃、中城御殿が米屋の火災を全焼し炎上
1945年	昭和20年	4月5日頃、大空襲を受けた御膳給(首里置)を御庫前の跡ろに移す 4月16日頃、日本下着廠を機織製陣地にする(上之御殿、実務棟など) 戦後、一時引き越さざるのバラックが建つ
1950年	昭和25年	1月、首里支役所が中城御殿跡に移転する 7月、首里支営バスが営業所を司教宅前に設置する(→65年まで)
1954年	昭和29年	首里支が那覇市に合併され、首里支役所が首里支所となる
1965年	昭和40年	琉球政府が、敷地購入 首里支所が当敷に移転、首里バス(1951年に長宮化)が当敷へ移転
1966年	昭和41年	10月、米国の援助により、新敷地に鉄筋コンクリート製の新館を建設し、龍潭池畔にある旧「琉球政府立博物館」が移転する。二月に開館
1972年	昭和47年	5月、日本復帰にあたり「沖縄県立博物館」と改称する
1991年	平成3年	県立博物館による石崖部分の第1次発掘調査実施
1992年	平成4年	県立博物館による石崖部分の第2次発掘調査実施
1994年	平成6年	県立博物館による石崖部分の第3次発掘調査実施
2006年	平成18年	8月、沖縄県立博物館が新館移転(おもろ遊園)のため久留館
2007年	平成19年	県立沖縄文化財センターに北の門が開始

首里城跡発掘調査（継世門北地区・書院南地区）

沖縄県立埋蔵文化財センター
調査班 主任 新垣 力

所在地：那覇市首里当蔵町3丁目1番（国営沖縄記念公園首里城地区）

目的：首里城復元整備に伴う遺構確認調査

時代：グスク時代～近世（14～16世紀、17～18世紀）

調査期間：平成26年7月1日～平成27年3月27日

調査面積：約800㎡

調査成果

1. 継世門北地区

- ①美福門（1422～39年創建と伝承）に関する遺構
 - 美福門東側石積みの根石
 - 平場（獅子像？の台座の一部も確認。南側には階段が取り付く）
 - 階段（磴道：幅が広く緩やかに傾斜する踏面と、高い蹴上を持つ）
 - ※美福門基壇の平場から12段検出。13段以降は戦後の造成で破壊。
 - ※階段1～7段の東側に平場が隣接。→拝所遺構と関連するものか。
 - ※階段9段以降の東側に石積みが隣接。→縁石の性格を持つものか。
- ②美福門創建以前の遺構
 - 基礎石積み（美福門石積みと平場の下層より検出。野面積みで構築）
- ③「赤田御門の御嶽」と考えられる拝所遺構
 - 直径約3～4m×高さ約2mの巨岩を上下2重の石積みで囲む
 - ※下層石積みは巨岩を円形に囲む。内部への出入口は不明。
 - ※上層石積みは下層遺構の上に構築。平面形は南側に開く「コ」の字形。
 - ※巨岩上面の自然凹部より、金製厭勝銭と青銅製銭貨が計23枚出土。
- ④ピット群
 - 美福門前階段及び継世門（1546年創建）下層の地山面より約30基検出
 - ※中には柱根らしき痕跡を持つものもあるが、明確なプランは不明。
 - ※遺構上部は戦後の造成で地山ごと掘削されたと考えられる。

2. 書院南地区

復元城壁の東側延長部に試掘トレンチを設定・掘削。→遺構・遺物包含層は未確認。

3. 主な遺物

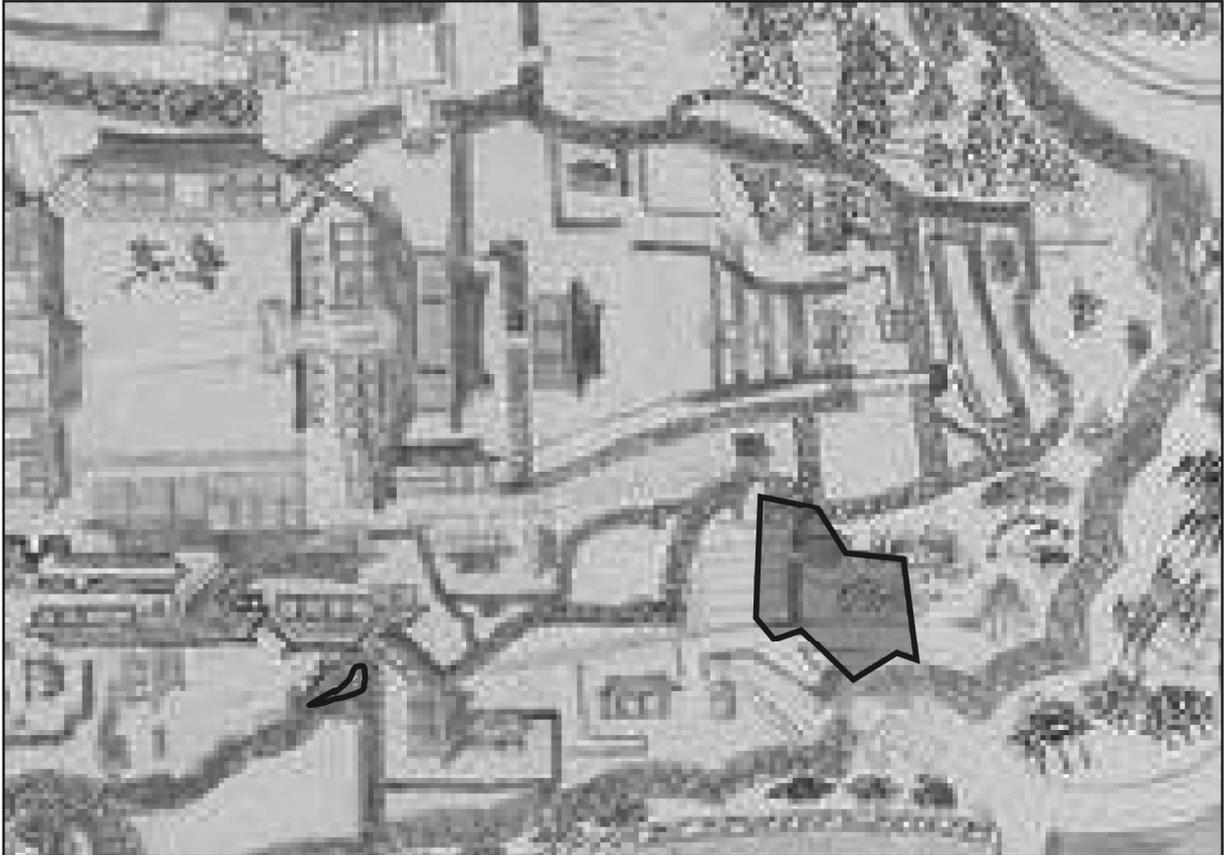
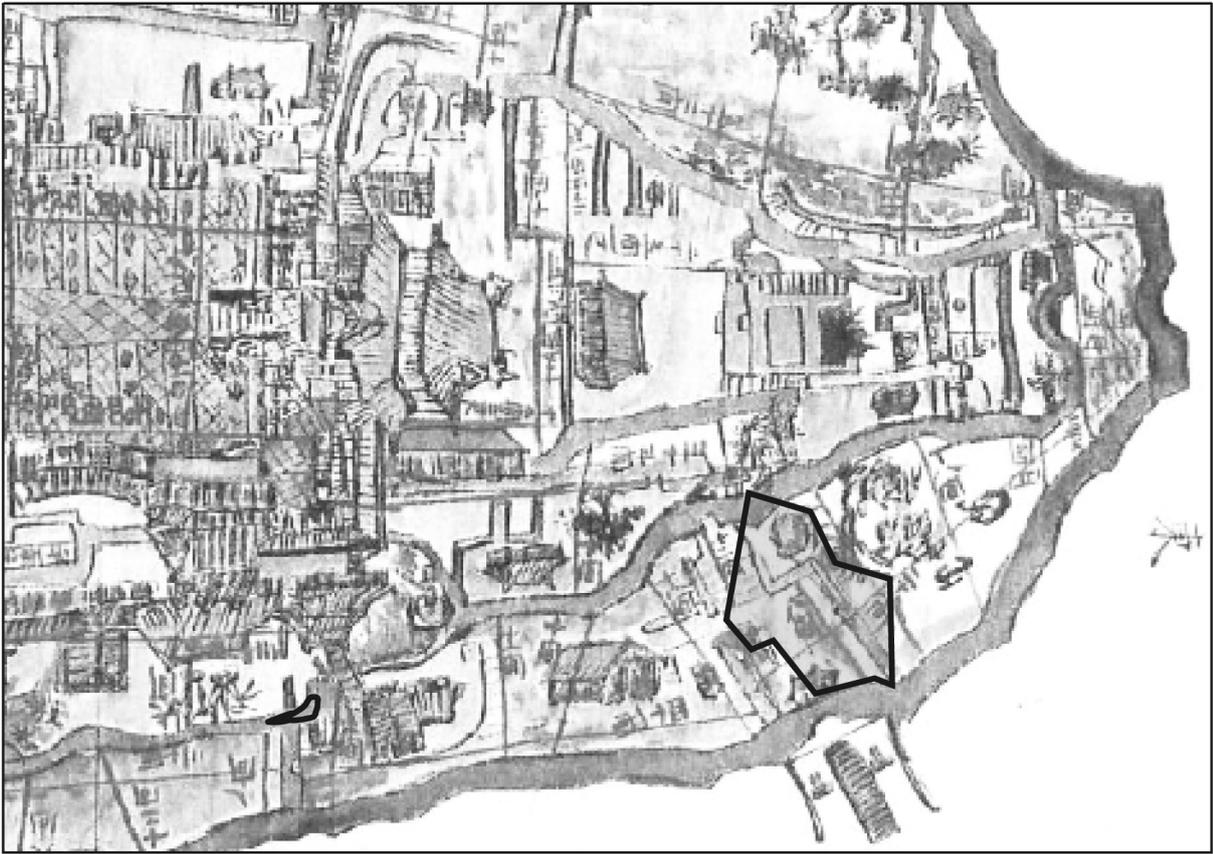
- 陶磁器類：産地は中国・東南アジア・日本・沖縄など
 - ※年代は15世紀前半～中葉、16世紀後半～17世紀前半、17世紀後半～18世紀前半
- 金属製品：金製（厭勝銭）・青銅製（銭貨・飾り金具・煙管・簪）、鉄製（刀子）など
 - ※金製厭勝銭・青銅製銭貨 → 「城内十嶽」での祭祀に関する可能性が高い
- 自然遺物：獣魚骨や貝類 → シャコガイやヤコウガイなど大型の貝殻が目立つ
- その他：貝製品（タカラガイ背面部加工品）、骨製品（半月状加工品）

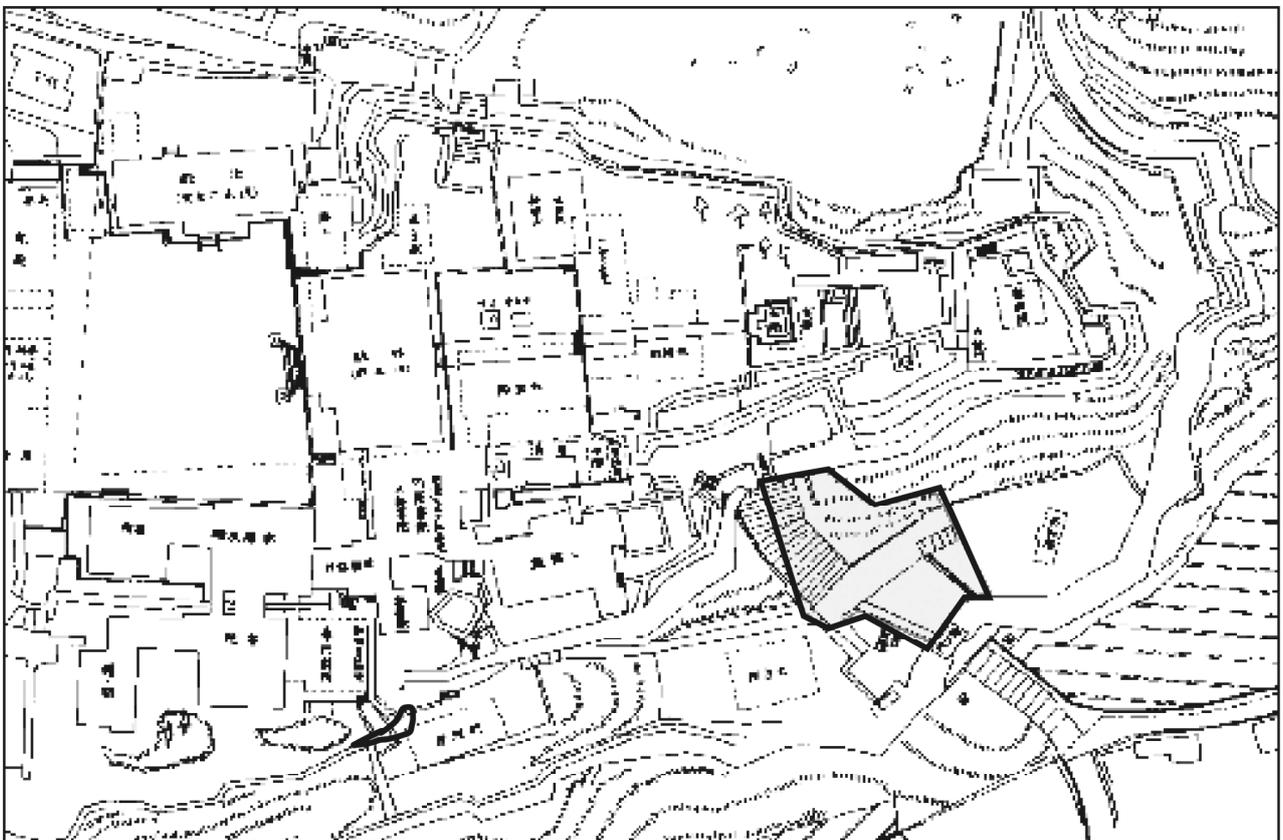
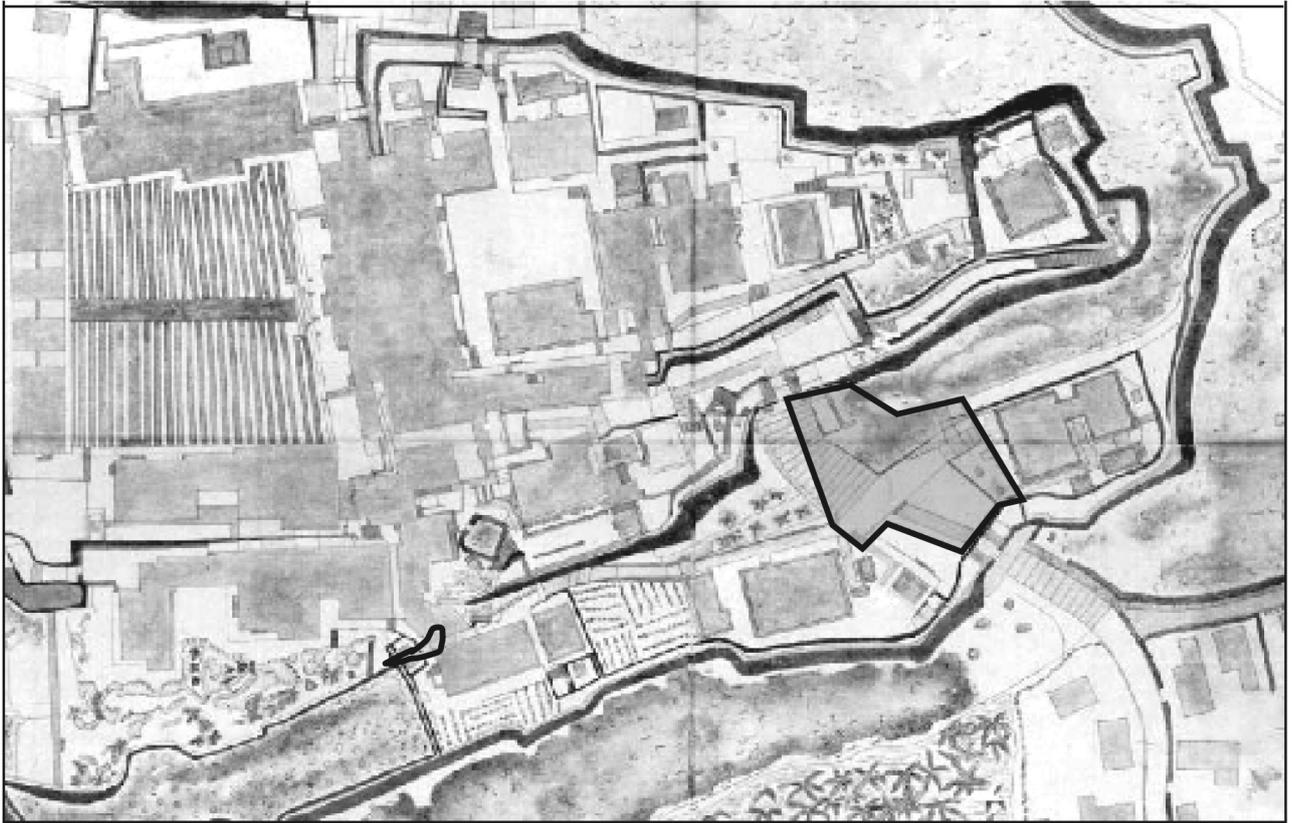


写真1 継世門北地区遺構検出状況(美福門基壇・平場・階段・拝所遺構など)



写真2 継世門北地区遺構検出状況(ピット群)





第4図 「旧自里城図（昭和6年頃作成）」にみる平成26年度調査区

沖縄県立埋蔵文化財センター
行事予定のご案内

今後の催しのご案内

パネル展

■東日本大震災の復興支援 《埋蔵文化財の発掘調査と文化財レスキュー》

①開催期間：平成27年 8月31日（月）～9月4日（金）

会場：沖縄県県庁 県民ホールA

②開催期間：平成27年 9月8日（火）～10月4日（日）

会場：沖縄県立埋蔵文化財センター エントランスホール

企画展

■中城御殿跡出土品展

開催期間：平成27年 10月16日（金）～12月13日（日）

会場：沖縄県立埋蔵文化財センター 企画展示室

※関連イベントを企画中です。詳細が決まり次第、当センターのホームページや、マスコミ等を通じて広報致します。

■重要文化財公開 「首里城京の内跡出土品展」

開催期間：平成28年 2月23日（火）～5月15日（日）

会場：沖縄県立埋蔵文化財センター 企画展示室

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7（琉球大学附属病院横）

TEL 098-835-8752

FAX 098-835-8754

●開所時間 午前9時～午後5時まで（入所は午後4時30分まで）

●休所日 毎週月曜日、年末年始

国民の祝日（こどもの日、文化の日を除く）、慰霊の日（6月23日）

※月曜日が祝日となった時は、翌日の火曜日も休所

その他、臨時休所あり